

「日本事情」における唱歌教材の妥当性

著者	伊志嶺 安博
雑誌名	長崎外大論叢
号	19
ページ	109-122
発行年	2015-12-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1165/00000343/



*The Journal of
Nagasaki University of Foreign Studies
No. 19 2015*

「日本事情」における唱歌教材の妥当性

伊志嶺 安 博

The Validity of Singing Teaching Materials in the Context of Japan

ISHIMINE Yasuhiro

長崎外大論叢

第19号
(別冊)

長崎外国語大学
2015年12月

【研究ノート】

「日本事情」における唱歌教材の妥当性

伊志嶺 安 博

The Validity of Singing Teaching Materials in the Context of Japan

ISHIMINE Yasuhiro

Abstract

Japanese language education courses aim primarily at providing the training of language skills in order to better understand Japanese society and culture in their context. Japanese people generally experience “Music” as one of the school subjects of compulsory education, thus getting exposed to singing activities that use music and Japanese lyrics. An investigation was conducted of the lexis used in the lyrics of common teaching materials provided during compulsory education, during the 6 years of primary school and the 3 years of secondary school, using these materials during Japanese language education for foreigners.

As a result it was found that, regarding their syntactic and lexical level, these materials were not suitable for foreign language learning.

Although it was concluded that singing activities did not foster a better understanding of the principles of lexis and pronunciation, the subject of music helps promoting an enjoyable lifestyle by singing and gives insight into the Japanese’s deep psychological connection to the feeling of nature and the seasons. From this viewpoint, incorporating Japanese songs into the language courses had some significance.

キーワード：日本語教育、日本事情、唱歌教材

1. 問題の所在

日本国では、グローバル化等に対応する人材力を強化するため、日本再興戦略及び第2期教育振興基本計画において、外国人留学生を2012（平成24）年現在の14万人から2020（平成32）年までに30万人に倍増させることを目指している（文部科学省2015a）。外国人留学生を増やすことは、受け入れ機関や関係者も増やす必要があり、日本語教育をめぐる教員養成、教育内容・方法、教材開発などの対応も求められる（文部科学省2015b）。

外国語として日本語を教える日本語教育機関（大学のみならず日本語学校など）には、外国語教育としての「日本語」科目と日本社会・文化理解のための「日本事情」科目が設定されている。日本語習得のためには、言語の四技能（聞く・読む・話す・書く）の習得レベルに応じて科目が設定され、それぞれのクラスの学習者や時間数にあわせた授業が行われる。一方、日本社会・文化理解のためには、受講生の言語能力に配慮がある場合は見られるものの、内容別の細分化に規定はなく、日本語科目と同じ学期内時間数で日本事情についての授業が行われるのである。

日本語学習者が日本語能力を測定するための試験には、外国人日本語学習者全般を対象にした「日本語能力試験」や日本への大学進学者を対象にした「日本留学試験」がある。さらに、特にビジネス

場面で必要とされる日本語コミュニケーション能力を測定するテストとして「BJT ビジネス日本語能力テスト」もある（日本漢字能力検定協会2015）。

日本語能力試験は「言語知識（文字・語彙・文法）」と「読解」、そして「聴解」の要素をマークシート方式解答によって5段階のレベルの評価を行うもの（国際交流基金・日本国際教育支援協会2015）である。

表1 日本語能力試験のレベルと要素

レベル	試験を構成する三つの要素 (各レベル)	課題遂行のための 言語コミュニケーション能力
N1	言語知識 (文字・語彙・文法)	①どのくらい知っているか
N2		
N3		
N4	読解	②どのくらい使えるか
N5	聴解	

国際交流基金・日本国際教育支援協会2015を参考に伊志嶺作成

留学試験もマークシート方式だが、英語でも受験ができる、「日本語」「理科(物理・化学・生物)」「総合科目」及び「数学」の中から進学希望大学が指定する科目を選んで受験するもの（日本学生支援機構2015）である。「日本語」科目には記述問題もある。

表2 日本留学試験の試験科目

出題言語	専攻	試験科目
日本語 及び 英語	文系	日本語、総合科目、数学
	理系	日本語、理科（物理、生物、化学から2科目選択）、数学

文部科学省2015cを参考に伊志嶺作成

留学試験の試験科目にある「総合科目」とは、「政治・経済・社会」を中心にして、「地理」と「歴史」も加えた3分野から総合的に出題されるもので、現代日本についての基礎知識、近現代の国際社会の基本的問題について論理的に考え、判断する能力があるかを判断する能力の有無を判定するためのものとされている。日本の大学で学ぶには、特に文系では、社会・地理・歴史などの知識が備わっていることが前提になっていると考えれば、日本の大学に「日本事情」科目が設置されているのは、社会・地理・歴史に関する理解を深めるためだと考えられる。

一方、日本語教育の教員にとっての基礎的な知識・能力を検定することを目的に実施される「日本語教育能力検定試験」では、1 社会・文化・地域、2 言語と社会、3 言語と心理、4 言語と教育、5 言語一般の五つが主要項目として区分されている（日本国際教育支援協会2015）。

表3の1や2の分野が「日本事情」クラスを担当するのに必要な分野であろう。これら分野において求められる知識・能力として、「社会・文化・地域」では「日本や日本の地域社会が関係する国際社会の実情や、国際化に対する日本の国や地方自治体の政策、地域社会の人びとの意識等を考えるために、次のような視点と基礎的な知識を有し、それらと日本語教育の実践とを関連づける能力を有していること」とあり、基礎的知識として以下の内容が挙げられている。

- ・国際関係論・文化論・比較文化論的な視点とそれらに関する基礎的知識
- ・政治的・経済的・社会的・地政学的な視点とそれらに関する基礎的知識
- ・宗教的・民族的・歴史的な視点とそれらに関する基礎的知識

表3 日本語教育能力試験の出題範囲

区分	主要項目
1 社会・文化・地域	1. 世界と日本 2. 異文化接触 3. 日本語教育の歴史と現状 4. 日本語教員の資質と能力
2 言語と社会	1. 言語と社会の関係 2. 言語使用と社会 3. 異文化コミュニケーションと社会
3 言語と心理	1. 言語理解の過程 2. 言語習得・発達 3. 異文化理解と心理
4 言語と教育	1. 言語教育法・実技（実習） 2. 異文化間教育・コミュニケーション教育 3. 言語教育と情報
5 言語一般	1. 言語の構造一般 2. 日本語の構造 3. コミュニケーション能力

日本国際教育支援協会2015

「言語と社会」では「言語教育・言語習得および言語使用と社会との関係を考えるために、次のような視点と基礎的な知識を有し、それらと日本語教育の実践とを関連づける能力を有していること」として、以下の基礎的知識が挙げられている。

- ・言語教育・言語習得について、広く国際社会の動向からみた国や地域間の関係から考える視点とそれらに関する基礎的知識
- ・言語教育・言語習得について、それぞれの社会の政治的・経済的・文化的構造等との関係から考える視点とそれらに関する基礎的知識
- ・個々人の言語使用を具体的な社会文化状況の中で考える視点とそれらに関する基礎的知識

参考に1993（平成5）年の「日本語教育推進施策について」にある日本語教育能力検定試験の出題範囲を見ると、4区分の一つに「日本事情（古典と文芸を含む）」があり、「1. 日本の歴史・地理」と「2. 現代日本事情」の主要項目が挙げられている（文部科学省2015f）。現代日本事情には、政治・社会と文化が対象になっている。この試験は、1987（昭和62）年から始まっているので、日本事情は重要視されていたものの、日本国内を中心にした知識から国際的・学術的な知識が求められてきている。

現在、日本語教育の教員として求められている資質養成のための新たな教育内容に注目すると、「日本事情」は「社会・文化に関わる領域」の中にある「社会・文化・地域」、「世界と日本」という区分に属している（文部科学省2015g）。この領域というのは、コミュニケーションを核として三つの領域を、それぞれに明確な線引きを行わず、いずれも等価と位置付けられたものである。そして、区分というのは、三つの領域をさらに五つの区分として設置されたもので、教育内容の位置づけや教員養成課程などで開設される科目との対応付けをするための目安にするためのものである。例えば、大学学部の日本語教育専攻で「日本事情」のために設けられる科目としては、課程共通科目の「現代世界論」「文化比較論」などが相当すると考えられる。

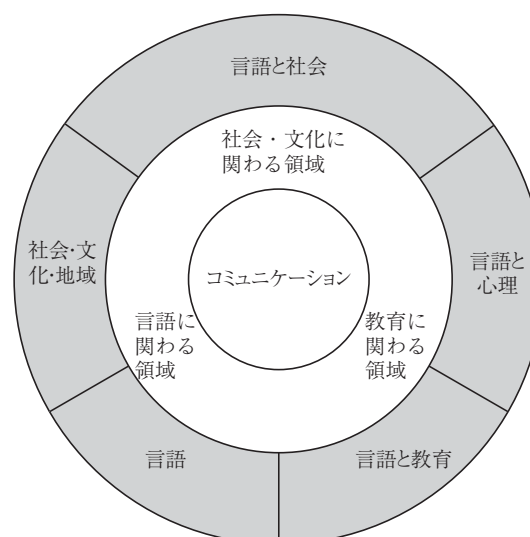


図1 新たに示す教育内容の領域・区分とコミュニケーションとの関係図

文部科学省2015g

日本語能力を養成する科目に関する教科書・参考書などの出版物は多いが、「日本事情」関連の教科書は少ない。その原因は、学習者の日本語レベルがさまざまであること、日本社会・文化を対象にするには対象も観点も多いことが考えられる。これは、これらの情報を示す媒体も同様で、情報が高速でやりとりできる時代になってきたことが、知識としての「日本事情」をまとめにくくしているのかもしれない。これからの「日本事情」の学習には、情報の検索や蓄積よりも多角的視野に立った判断能力の養成が求められていることになるのだろう。

2. 先行研究と調査方法

「日本事情」教育とは「『学習者の異文化対処行動能力の育成』を目標にした総合支援活動」である（長谷川1999：p. 4）。1936（昭和11）年に満州で「日本事情」を主題とした大出正篤著『日語研究宝鑑』が出されるなど、日本語教育における「日本事情」は必要だと言われてきた。

しかし「日本事情」関係の研究はある（門倉・細川1999：pp. 84-99）ものの、これらの中には、日本人が受けてきた教育で言語に大きく関係しているであろう「音楽」科目に注目した議論が取り上げられていないため、ぜひ加えるべき議論であると考えられる。

2006（平成18）年12月22日、法律第120号として「教育基本法」が改正され、第1章「教育の目的及び理念」の（教育の目標）第2条の第5項には「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」が明記され、「人間性と創造性を備えた人間の育成」と「新しい文化の創造」を目指した教育が推進されている（花田2011：p. 9）。自国の伝統文化の理解と他国の尊重が、日本人としての国際社会に向かう際の態度だというのである。これは、共同体・コミュニティの各メンバーが自文化中心主義（エスノセントリズム）に陥ることなく、異文化間の人々の偏見・差別・対立・紛争などを回避するために、互いの権利を認めつつ協力し合って新しい共同体やコミュニティなどの構築を旨とする多文化共生教育にも重なる考え方である（村田2013：p. 184）。

日本の伝統文化にとって音楽、特に歌唱活動は重要であり、人々を結び付ける役割を持っていると言えるだろう。所属する組織にもそのほとんどに歌（校歌や社歌など）があり、校歌は日本の歌曲の中でもっとも多い7万余曲を数え、労働のための歌（ワークソング）を含めた民謡はその次に多く5万8千曲になるという（田中2008：p. 262）。唱歌には「戦地でも、みんなが歌った。勇ましい軍歌もあるが、夜は更けてたいして食糧もない、話も尽きた、というときに、誰かが持っていたハーモニカで『故郷（ふるさと）』『朧月夜』『春の小川』などの唱歌を吹くと、みんなしんみり聞いた」（日下2013：p. 49）というように日本人同士を結ぶ力がある。

日本社会における日常生活において、商業に利用されている広告ソングや流行歌など、また地域の民謡や所属団体の校歌・社歌などさまざまな歌曲があるが、現在の日本人の老若男女がみな知っている歌曲とえば、義務教育の小学校6年と中学校3年に「音楽」科で学ぶ歌である。もちろん、時代の流れで以前の流行歌が合唱曲などに使われることもあるが、義務教育課程の6年で扱わなければならない歌曲もある。

本研究では、日本人の義務教育の必須科目「音楽」で扱われる唱歌教材における語彙の難易度を、外国語としての日本語教育の基準で捉えなおす。日本語学習者のための能力検定試験の基準を用いて、語彙の難易度を見るのである。さらに、外国語教育としての日本語教育にとっての「音楽」教材

の意義を考察し、今後の教育内容の発展をめざすものとしたい。

3. 日本の学校教育における歌

3. - 1 小・中学校「音楽」科の目標・表現内容

日本の教育制度では小学校6年と中学校3年が義務教育になっており、日本国民であれば平等にこの9年の課程の教育を受けられる権利が、基本的人権として保障されている。この日本人としての基礎的知識を習得する教育科目の一つに音楽教育がある。その目標として、小学第1・2学年では「創造的に音楽にかかわり、音楽活動への意欲を高め、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにする態度と習慣を育てる」ことが挙げられている。

表4 小学校の音楽科の目標と「表現」内容

学年	目標	表現
小学第 1・2学年	創造的に音楽にかかわり、音楽活動への意欲を高め、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにする態度と習慣を育てる	ア 範唱を聴いて歌ったり、階名で模唱したり暗唱したりすること イ 歌詞の表す情景や気持ちを想像したり、楽曲の気分を感じ取ったりし、思いをもって歌うこと ウ 自分の歌声及び発音に気を付けて歌うこと エ 互いの歌声や伴奏を聴いて、声を合わせて歌うこと
小学第 3・4学年	進んで音楽にかかわり、音楽活動への意欲を高め、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにする態度と習慣を育てる	ア 範唱を聴いたり、ハ長調の楽譜を見たりして歌うこと イ 歌詞の内容、曲想にふさわしい表現を工夫し、思いや意図をもって歌うこと ウ 呼吸及び発音の仕方に気を付けて、自然で無理のない歌い方で歌うこと エ 互いの歌声や副次的な旋律、伴奏を聴いて、声を合わせて歌うこと
小学第 5・6学年	創造的に音楽にかかわり、音楽活動への意欲を高め、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにする態度と習慣を育てる	ア 範唱を聴いたり、ハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして歌うこと イ 歌詞の内容、曲想を生かした表現を工夫し、思いや意図をもって歌うこと ウ 呼吸及び発音の仕方を工夫して、自然で無理のない、響きのある歌い方で歌うこと エ 各声部の歌声や全体の響き、伴奏を聴いて、声を合わせて歌うこと

文部科学省2015d

小学第3・4学年の目標は「進んで音楽にかかわり、音楽活動への意欲を高め、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにする態度と習慣を育てる」こととなり、さらに小学校第5・6学年での目標は「創造的に音楽にかかわり、音楽活動への意欲を高め、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにする態度と習慣を育てる」ことになる（文部科学省2015d）。伴奏や他の高さの旋律にも注意し、自分の発声にも気をつけながら合唱することは、協調性を養うことにもなるのである。

中学校になると第1学年の目標は「音楽活動の楽しさを体験することを通して、音や音楽への興味・関心を養い、音楽によって生活を明るく豊かなものにする態度を育てる」ことである。

中学校になると、技巧面の向上と表現への配慮が挙げられるようになる。さらに中学校第2・3学年になると、目標は「音楽活動の楽しさを体験することを通して、音や音楽への興味・関心を高め、

表5 中学校の音楽科の目標と「表現」内容

学年	目標	表現
中学校 第1学年	音楽活動の楽しさを体験 することを通して、音や 音楽への興味・関心を養 い、音楽によって生活を 明るく豊かなものにする 態度を育てる	ア 歌詞の内容や曲想を感じ取り、表現を工夫して歌うこと イ 曲種に応じた発声により、言葉の特性を生かして歌うこと ウ 声部の役割や全体の響きを感じ取り、表現を工夫しながら合 わせて歌うこと
中学校 第2・3学 年	音楽活動の楽しさを体験 することを通して、音や 音楽への興味・関心を高 め、音楽によって生活を 明るく豊かなものにし、 生涯にわたって音楽に親 しんでいく態度を育てる	ア 歌詞の内容や曲想を味わい、曲にふさわしい表現を工夫して 歌うこと イ 曲種に応じた発声や言葉の特性を理解して、それらを生かし て歌うこと ウ 声部の役割と全体の響きとのかかわりを理解して、表現を工 夫しながら合わせて歌うこと

文部科学省2015e

表6 小学校の学年別歌唱教材

学年	名前	ジャンル	作詞	作曲
第1学年	うみ	文部省唱歌	林柳波 <small>りゅうは</small>	井上武士 <small>たけし</small>
	かたつむり	文部省唱歌		
	日のまる	文部省唱歌	高野辰之 <small>たかの たつゆき</small>	岡野貞一 <small>ていいち</small>
	ひらいたひらいた	わらべうた		
第2学年	かくれんぼ	文部省唱歌	林柳波	下総皖一 <small>しもふさかんいち</small>
	春がきた	文部省唱歌	高野辰之	岡野貞一
	虫のこえ	文部省唱歌		
	夕やけこやけ		中村雨紅 <small>うごう</small>	草川信 <small>しん</small>
第3学年	うさぎ	日本古謡		
	茶つみ	文部省唱歌		
	春の小川	文部省唱歌	高野辰之	岡野貞一
	ふじ山(ふじの山)	文部省唱歌	巖谷小波 <small>いわ やさぎなみ</small>	
第4学年	さくらさくら	日本古謡		
	とんび		葛原しげる <small>くずはら</small>	梁田 貞 <small>やな ただし</small>
	まきばの朝	文部省唱歌		船橋栄吉
	もみじ	文部省唱歌	高野辰之	岡野貞一
第5学年	こいのぼり	文部省唱歌	近藤宮子	
	鯉のぼり	文部省唱歌		弘田龍太郎
	子もり歌	日本古謡		
	スキーの歌	文部省唱歌	林柳波	橋本国彦
	冬げしき	文部省唱歌		
第6学年	越天楽今様(第2節まで)	日本古謡	慈鎮和尚 <small>じちん</small>	慈鎮和尚
	おぼろ月夜	文部省唱歌	高野辰之	岡野貞一
	ふるさと	文部省唱歌	高野辰之	岡野貞一
	われは海の子(第3節まで)	文部省唱歌		

文部科学省2015d

音楽によって生活を明るく豊かなものにし、生涯にわたって音楽に親しんでいく態度を育てる」ことになる（文部科学省2015e）。

小学校・中学校における「音楽」科目の指導目標は、音楽によって生活を明るく豊かにすることが目的であることが分かる。小学校では「創造的に、進んで」音楽に関わり、中学校では「体験を通して」生活を向上させていこうというのである。その中でも、歌唱活動は小学校第1学年から範唱の通り歌い、歌詞や曲想を感じ、より良い合唱ができるようにすることが求められている。

具体的な歌唱教材については、小学校では学年別の共通教材があり（文部科学省2015d）、中学校では共通教材から学年で1曲以上を選んでいくかたちをとる（文部科学省2015e）。

小学校の教材は「文部省唱歌」が多いが、中学校の教材は1945（昭和20）年以降の作品も多い。その点が小学校の教材と中学校の教材の特徴であると言える。

近代日本の学校教育では、1982（明治5）年にそれまでの「読み書き算盤」型の教育内容が一新された「学制」が発表された。その下等小学の14教科「綴字、習字、単語、会話、読本、修身、書牘、文法、算術、養生法、地理大意、窮理学大意、体術、唱歌」には唱歌が取り入れられている（山東2008：p.12）。この流れ

の唱歌教材が現在の「音楽」科教材まで受け継がれてきたことは、日本独自の音楽文化として定着したと言えるだろう。「唱歌」科は、近代化のための学校教育体制と学科目編成の変容の中で「国語」科と同じく言語使用の重要な役割があったと考えられるだろう。

「文部省唱歌」という教材は、1910（明治43）年から1944（昭和19）年の小学校科目「唱歌」のために創作された作品である。特に1879（明治12）年9月に設置された「音楽取調掛^{とりしらべかかり}」によって「文部省唱歌」が作成されたのであるが、その設置年は学制が廃止され教育令が公布された日本教育史にも重要である。

表7 中学校の共通唱歌教材

名前	作詞	作曲
赤とんぼ	三木露風 ^{ろふう}	山田耕筰 ^{こうさく}
荒城の月	土井晩翠 ^{ばんすい}	滝廉太郎 ^{れんたろう}
早春賦	よしまるかずまさ 吉丸一昌	なかだあきら 中田章
夏の思い出	江間章子	よしなお 中田喜直
花	はごろも 武島羽衣	滝廉太郎
花の街	江間章子	だんいくま 團伊玖磨
浜辺の歌	こけい 林古溪	ためぞう 成田為三

文部科学省2015e

表8 唱歌教科書と国定教科書

唱歌教科書	発行年：和暦（西暦）	国定教科書
尋常小学 読本唱歌	明治43（1910）年	尋常小学 児童用
尋常小学唱歌	明治44（1911）～大正3（1914）年	
新訂 尋常小学唱歌	昭和7（1932）年	
ウタノホン 上 [第1学年用]	昭和6（1931）年	
うたのほん 下 [第2学年用]	昭和16（1941）年	
初等科音楽 一 [第3学年用] ～四 [第6学年用]	昭和17（1942）年	高等小学 児童用
高等小学唱歌	昭和5（1930）年	
新訂 高等小学唱歌 （男子用・女子用）	昭和10（1935）年	
高等科音楽（男子用・女子用）	昭和19（1944）年	

中村2008：pp.180-182を編集

3.-2 教材における語彙の数量

日本人が小学校・中学校で学ぶ「音楽」科目の教材における語彙を、外国語としての日本語という観点で見とみることにする。

まずは語彙を品詞別に見て、さらに文章構造などにも注目して見ることにする。

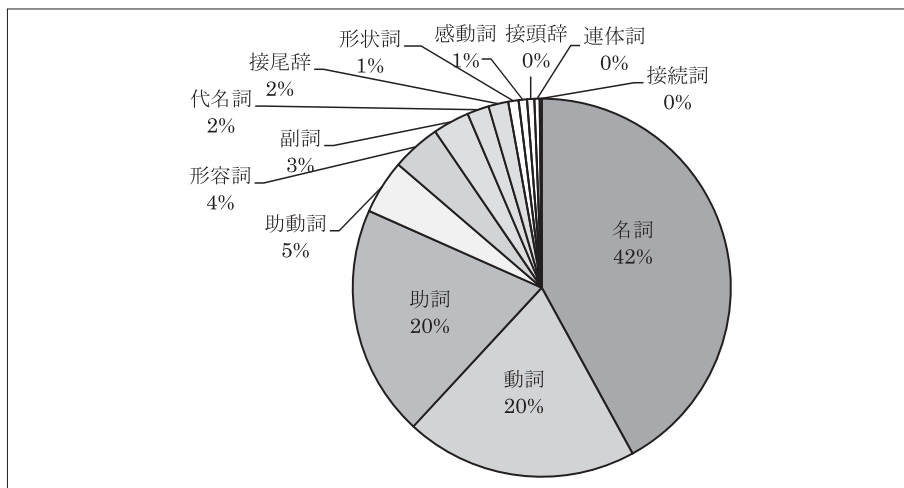


図2 唱歌教材にある語彙の品詞割合

「音楽」科の唱歌教材にある語彙の異なり語数の総数は1123語になった。その中で、名詞は472語（42.03%）、動詞は223語（19.86%）、そして助詞222語（19.77%）となり、これらが約8割を占める結果になった。膠着語である日本語では、名詞と名詞、名詞と動詞などを助詞によって繋げていくため、これらの語が多数を占めるのは理解できる。しかし、様子を表す形容詞や程度を表す副詞などが少ないのは、抽象的な表現よりも具象的な表現が多用されていることになる。

そして、その語彙を日本語能力検定試験の語彙レベルから判断することによって日本語語彙としての難易度を考える。

手順としては、歌詞の原文を品詞別に分け、同音異義語の意味や品詞の判断、そして日本語能力検定試験を基準にしたレベル分けは筆者が行った。なお、レベル分けは2010年に変更されたN5からN1の五段階ではなく、それ以前の4級から1級までの四段階とした。入門、初級、中級、上級というレベルの目安が比較的容易だと思われるからである。

表9 唱歌教材にある語彙の品詞分類

品詞（上位分類）	異なり語数	品詞（下位分類）	異なり語数
感動詞	8	感動詞－フィラー（間を埋める語）	4
		感動詞－一般	4
形状詞	10	形状詞－タリ	2
		形状詞－一般	6
		形状詞－助動詞語幹	2
形容詞	47	形容詞－一般	42
		形容詞－非自立可能	5
助詞	222	助詞－格助詞	105
		助詞－係助詞	39
		助詞－終助詞	12
		助詞－準体助詞	1
		助詞－接続助詞	41
		助詞－副助詞	24
助動詞	52	助動詞	52
接続詞	2	接続詞	2
接頭辞	7	接頭辞	7
接尾辞	19	接尾辞－形状詞的	3
		接尾辞－形容詞的	1
		接尾辞－名詞的－一般	14
		接尾辞－名詞的－副詞可能	1
代名詞	35	代名詞	35
動詞	223	動詞－一般	162
		動詞－非自立可能	61
副詞	35	副詞	35
名詞	472	名詞－固有名詞－人名	10
		名詞－固有名詞－地名	8
		名詞－数詞	5
		名詞－普通名詞－サ変可能	8
		名詞－普通名詞－一般	374
		名詞－普通名詞－形状詞可能	1
		名詞－普通名詞－助数詞可能	11
		名詞－普通名詞－副詞可能	55
連体詞	5	連体詞	5

3.-3 教材における語彙の難易度

小学校の「音楽」教材は、学年が上がるのに伴った語彙数の急激な増加はないものの、日本語能力試験4級や3級レベルの語よりも2級や1級、そして級外といった難易度が高い語彙の多用が見られる(図3)。総語彙数では、一曲の平均語彙数は小学校第1学年19.75語、第2学年27語、第3学年27.25語、第4学年35語、第5学年40.2語、第6学年37.75語となり、中学校では45.29語になる。級外語彙の平均含有率は小学校第1学年16.72%、第2学年19.51%、第3学年18.62%、第4学年21.66%、第5学年25.03%、第6学年32.16%、そして中学校が21.48%であった。語彙数では小学校第6学年で減少があるものの増加傾向が見られ、級外語彙の含有率も中学校で減少が見られるものの、全体的には小学校第1学年から第6学年、そして中学校へ続く唱歌教材の語彙数・級外語彙の割合は増加していることが分かった。

小学校第1学年の初出教材「うみ」は語彙数も33語と多量ではなく、級外語彙の含有率も6.06%と難易度が高い語彙も少ないので、データとしては理解しやすい内容だと思われる。しかし、構文上の問題(体言止め、倒置法、助詞の組み合わせなど)が障害になって、難易度を高めている。

「うみ」

海は 広いな 大きいな 月が のぼるし 日が 沈む
 (3) (3) (3) (3) (2)

海は 大波 青い波 ゆれて どこまで 続くやら
 (外) (2) (3) (3) (2)

海に お舟を 浮かばして 行ってみたいな よその 国
 (3) (2) (?) (2) (3) (2)

歌詞下部の(3):日本語能力試験3級レベル、(2):2級、(1):1級、(外):級外

上記「うみ」の歌詞の一番を構造上に見ると、まず「海は広い」の次に「(海は)大きい」と、主語の省略がある。終助詞「な」も、機能的な文法構造で教えられる外国語としての日本語教育では初級後半から扱われるものである。そして、「~するし、~する」のかたちではよく助詞が「も」ではなく「が」が使われており、最後も「他所の国に行ってみたいな」が倒置された形である。つまり、

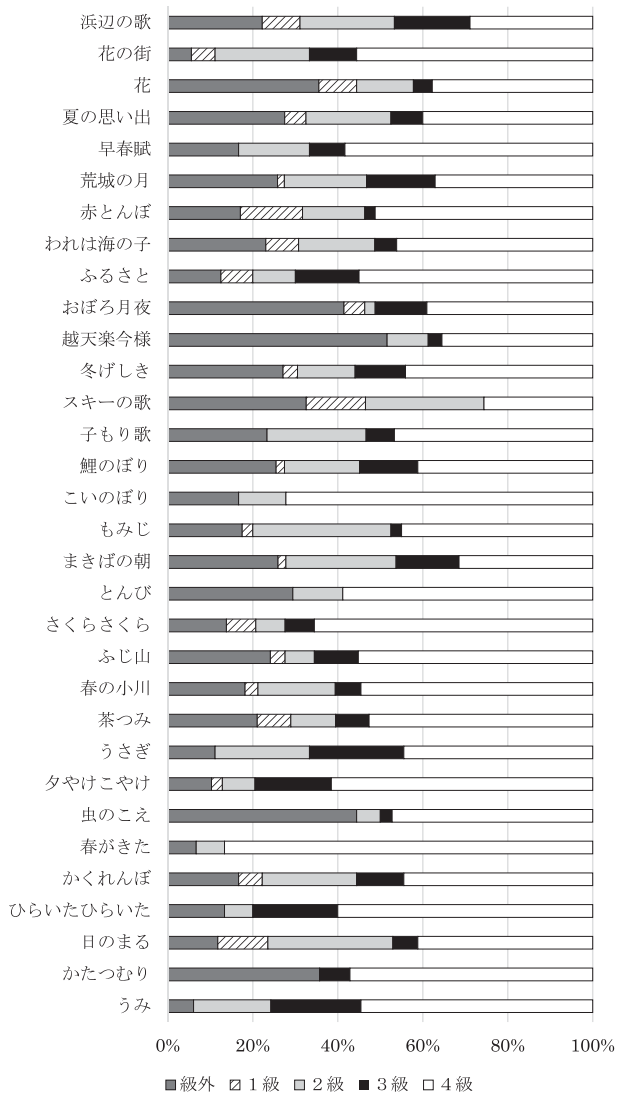


図3 教材の語彙レベル

データとして語彙の難易度が高くなくても、その使い方で外国語教材としては難解なものになるのである。

一方、同学年の「かたつむり」は、カタツムリの異名にもなっている「でんでん虫」、「でんでんむしむし、かたつむり」（「出てこい、出てこい、虫、虫」が変化したものという説もある）から始められている。

「かたつむり」

でん でん むし むし かたつむり
(外) (外) (外)

お前 の あたま は どこ に ある
(外)

つ の 出せ やり 出せ あたま 出せ
(外) (外)

語彙ではさらに日常生活ではあまり使用されない語彙「角（つの）、槍」が使われ、文としては助詞「を」を使用せずに述語動詞は命令形「出せ」と使われている。

季節や年中行事に関係した第3学年の「うさぎ」（中秋：月見）や第5学年の「こいのぼり」（端午：こどもの日）にも同じことが言える。

「うさぎ」

うさぎ うさぎ
(3) (3)

なに 見て はねる
(2)

十五夜 お 月 さま 見て はねる
(外) (3) (2) (2)

「何を見て」の助詞の省略、「何を……跳ねる?」「月を……跳ねる。」という違いは、外国語教材としては、解説が必要になるものである。

それぞれの教材の関連事項と時期を見ると次の通りになる。関連事項は大きく「自然・動植物、社会・行事」など、時期は四季（春夏秋冬）に分けることを目指したが、複数の分類項目が必要になる場合や適当な分類ができない場合もあった。

しかし、「春がきた」「われは海の子」「もみじ」「冬げしき」などは季節感を表現する歌として、「こいのぼり」「茶つみ」は年中行事・活動を表現する歌として、「ふじ山」「日のまる」は山や太陽という自然を日本の象徴として表現する歌である。これらの歌を合唱していくことは共同体の結びつきの強化につながっているであろう。

中学校の歌唱教材は語彙の難易度が高い。小学校の具象的な内容から続く、季節や自然をモチーフにした唱歌教材は抽象性が高められ、教養の高い共同体所属者としての意識を作るためなのであろう。

唱歌教材の最大の特徴に、作品自体の恒常性がある。歌詞や歌曲は、共に作り出された一つの作品として、受けつがれる限り変化することはない。この点において、音楽教育の歌唱活動の意義は「伴奏や模範歌唱に合わせて自らの声を発する」ことが記憶の定着や発音の矯正につながる活動のための材料として言語習得にも関係する重要なポイントだと考えられる。

表10 関連事項と時期（小学校）

学年	名前	関連事項	時期
第1学年	うみ	自然	
	かたつむり	動物	梅雨（5・6月）
	日のまる	旗・社会生活	
	ひらいたひらいた	植物	春
第2学年	かくれんぼ	遊戯	
	春がきた	自然	春
	虫のこえ	自然	秋
	夕やけこやけ	自然・社会生活	
第3学年	うさぎ	動物	秋
	茶つみ	行事・自然	春
	春の小川	自然	春
	ふじ山（ふじの山）	自然	冬
第4学年	さくらさくら	植物	春
	とんび	動物	
	まきばの朝	自然	
	もみじ	植物	秋
第5学年	こいのぼり	行事	春
	鯉のぼり	行事	春
	子もり歌	社会生活	
	スキーの歌	遊戯	冬
	冬げしき	自然	冬
第6学年	越天楽今様（第2節まで）	自然	春
	おぼろ月夜	自然	春
	ふるさと	社会生活	
	われは海の子（第3節まで）	自然・社会生活	

表11 関連事項と時期（中学校）

名前	関連事項	時期
赤とんぼ	自然・動物	秋
荒城の月	自然・社会生活	春・秋
早春賦	自然	春
夏の思い出	自然	夏
花	自然・社会生活	春
花の街	自然	春
浜辺の歌	自然	

4. まとめと課題

異文化理解としての外国語教育として日本語教育を捉えると、社会的知識の基本である学校教育の教科目と対照的だと言える。学校教育の教科目は「国語・算数・理科・社会」が基本になり、健康のための「保健・体育」や芸術の「図画・工作」「音楽」などがあるが、外国人の異文化理解の場合、算数、理科、保健・体育、図画・工作は共通した知識であることが多いため、国語と社会、そして音

楽が異文化としての知識情報ということになる。このことから、外国語教育としての日本語教育では、言語能力養成のための「日本語」科目と異文化理解のための「日本事情」科目がその役を担っているといえるだろう。

特に、本研究で注目した音楽を社会的活動の面で捉えると、共有している知識を確認できる「共時性」と作品が伝承・再生される「通時性」が、大きな特徴である。その活動によって、共同体に存在する者同士が共有する情報が確認され、残されていくのである。

日本の学校教育で教えられている「音楽」とは、小学校から中学校まで共通して教えられているのは「明るく豊かな」生活のための関わりの一つであるといえる。語彙や内容構造の難易度よりも、歌唱行為や合唱の楽しさ、そして旋律やことばで表現される情景を思い描きながら「音を楽しむ」ということであろう。

しかし、日本人が皆知っているとはいえ、外国人が耳にする、または口にする機会やその頻度が重要であろう。幼少期に習った歌を、外国人に紹介する、または一緒に歌うという機会は頻繁にあるとは考えられない。例えば、年中行事や儀礼的な行事に多くの留学生が参加することは考えられない。正月や盆行事などの年中行事には日本人を介して参加することがあるとしても、大学の入学・卒業式を除いた儀式（結婚式や葬式）に参加することはほぼないと考えたほうがいいであろう。また、儀式に参加したとしても、国歌や校歌斉唱を歌う機会は少なく、そもそも厳かな式典で参加者全員が斉唱する機会は少ない。それでも、日本の学校教育には「音楽」科目があり、歌唱という音楽表現の活動内容は「歌詞の表す情景や気持ちを想像したり、楽曲の気分を感じ取ったりし、思いをもって」歌を聞いたり歌ったりすることが重視されているのである。

それをふまえた上で、日本事情における唱歌教材の重要性について考えれば、異文化理解（日本人の情緒）としての学習に取り上げる意味があることは外国人学習者のための科目としては妥当であるといえるだろう。一方で、日本語教育能力検定試験などにおける教員のための対応は複雑である。なぜなら、日本人ではない教員への対応が必要になるからである。旋律がある文学作品を、季節や歴史的文化的背景などを理解した上で日本ではない場所（海外）で教えることになることから、その環境整備はかなり困難であると考えられる。

もし今後、日本語教育で「音楽」科にある唱歌教材が教えられるようになると、外国語能力の養成の面でも語彙の定着や発音の矯正などに貢献できることも考えられるし、表現例や文法解説などには実際のコミュニケーション例などを示す導入にも利用できることも考えられる。同時に、これら唱歌教材は季節感や情景を表現した芸術作品であり、社会的な影響や歴史的意義などについての存在価値の評価対象として「日本事情」で扱うべき文化の一面となるであろう。雪が降らない沖縄から流水が押し寄せる北海道まで、南北に長い日本列島で生活する日本人の深層心理にあるアイデンティティは、小学校・中学校の「音楽」科目で習得した季節の移り変わりや自然を象徴した唱歌教材内容を共有している、日本人としての共同体所属意識を持っているからである。

参考文献

- 門倉正美・細川英雄 (1999) 『『日本事情』文献一覧』『21世紀の『日本事情』』編集委員会編集『21世紀の「日本事情」—日本語教育から文化リテラシーへ』『日本事情』研究会、pp. 84-99
- 日下公人 (2013) 『いま日本人に読ませたい「戦前の教科書」』、祥伝社

国際交流基金・日本国際教育支援協会『日本語能力試験』「日本語能力試験とは；4つの特徴」

<http://www.jlpt.jp/about/points.html> (2015年11月19日確認)

山東功 (2008)『唱歌と国語——明治近代化の装置』講談社

田中健次 (2008)『図解日本音楽史』、東京堂出版

中村紀久二編 (2008)『国定教科書編纂趣意書〔第14巻〕(解説・文献目録) 復刻版』、国書刊行会

日本学生支援機構『留学生支援』「日本留学試験 (EJU) ; 日本留学試験 (EJU) とは ; 」

http://www.jasso.go.jp/eju/whats_eju.html (2015年11月19日確認)

日本漢字能力検定協会『BJT ビジネス日本語能力テスト』「BJT ビジネス日本語能力テストとは」

<http://www.kanken.or.jp/bjt/about/> (2015年11月19日確認)

日本国際教育支援協会『日本語教育能力検定試験』「出題範囲」

<http://www.jees.or.jp/jltct/range.htm> (2015年11月19日確認)

長谷川恒雄 (1999)「『日本事情』—その歴史的展開—」「21世紀の『日本事情』」編集委員会編集『21世紀の「日本事情」—日本語教育から文化リテラシーへ』『日本事情』研究会、pp. 4-15

花田修一編著 (2011)『伝統的な言語文化の学習指導事例集 4 (詩歌・唱歌・芸能を中心とした学習指導事例集)』、明治図書出版

村田翼夫、上田学編著 (2013)『現代日本の教育課題 21世紀の方向性を探る』、東信堂

文部科学省『今後の留学生政策について』

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1338568.htm (2015年11月19日確認 a)

文部科学省『平成12年度 我が国の文教施策』「第1部 第3章 第5節 4 日本語教育や日本文化の教育・研究の推進」

http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad200001/hpad200001_2_100.html (2015年11月19日確認 b)

文部科学省『我が国の留学生制度の概要』「II 7 日本留学試験」

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/12/12/1286521_4.pdf (2015年11月19日確認 c)

文部科学省『現行学習指導要領・生きる力 小学校学習指導要領』「第2章 各教科 第6節 音楽」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/on.htm (2015年11月19日確認 d)

文部科学省『現行学習指導要領・生きる力中学校学習指導要領』「第2章 各教科 第5節 音楽」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/on.htm (2015年11月19日確認 e)

文部科学省『日本語教育推進施策について—日本語の国際化に向けて— 平成五年七月一四日』

http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19930714001/t19930714001.html (2015年11月19日確認 f)

文部科学省『日本語教育のための教員養成について (報告) (抄) 平成一二年三月三〇日』

http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19930714001/t19930714001.html (2015年11月19日確認 g)